

# 平成 21 年度第 3 回函館市観光アドバイザー会議議事録

## 開催概要

開催日時 平成 21 年 12 月 18 日(金) 16:00~17:30

開催場所 函館市地域交流まちづくりセンター

出席委員 木村委員, 田中委員, 黒川委員, 藤澤委員, 堀川委員, 遠藤委員, 中野委員  
全委員, 折谷委員, 原田委員

欠席委員 古屋委員

## 次 第

- 1 開 会
- 2 挨拶 函館市観光コンベンション部長
- 3 委員紹介
- 4 座長選出
- 5 座長挨拶
- 6 説 明
  - ・函館市観光基本計画について
  - ・平成 21 年度事業概要について
  - ・観光圏整備法に基づく「(仮称)はこだて観光圏」の認定申請について
- 7 意見交換
- 8 その他
- 9 閉 会

## 座 長 選 出

・事務局より, 公立はこだて未来大学 木村 健一 委員を座長としたい旨の案を提示し, 各委員に諮ったところ, 全員異議無く了承された。

## 座 長 挨 拶

・私が現在の基本計画の策定をしていた 2000 年に T S A ( = Tourism Satellite Account 旅行・観光産業の経済効果を明らかにするための世界標準的な統計手法 ) という, 観光を世界基準で評価するという方法が発表され, 2010 年に導入が本格化する。このことで, 函館が蓄えてきた統計データが世界標準と比べながら, 客観的に議論出来ると同時に, 世界的競争の中に函館が入っていくことになる。

・今後, 観光基本計画に関する色々な議論をしていくが, 計画の終年度である 2013 年は北海道新函館開業の直前の年。この会議では, 開業後 10 年, 20 年を見据えた議論をしていき

たいと考えている。

・観光入り込みに関して、平成21年度上期において、7.5%減という大変厳しい数字となっていることに驚いている。ただし、来年は必ず盛り返すのではないかとの希望を込めて、皆様から現状の打開策を含めたアイデアを頂戴し、それを語り合いたいと思う。

・観光は民業そのものだが、アカデミックな立場や、実際に活動し、実績を上げている専門家の立場からの意見を頂き、忌憚のない議論をしていきたいと思うので、よろしく願いしたい。

### 意見交換における発言要旨

(黒川委員)

・先日、函館が魅力的な街全国1位になったが、実際、誘客に結びついていない。イメージと実態をどう近づけるかが課題だと思う。来年も引き続き1位だと良いのだが、落ちるとイメージダウンにもなる。

・函館市も様々な手法によりPRしてきていると思うが、PRが足りないという声も聞ける。こういった声を聞くと、首都圏だけでなく、札幌を狙っていくことも方向性として大事なのではないかと考える。

(堀川委員)

・新規観光資源の創出や広域観光の推進は大事なことであると思うが、同時並行でアピールをどうしていくのかということが大事。チャーター便の減少の背景には、台湾の国内事情があるにしても、マーケット自体が縮小している。それに代わるマーケットとして、韓国やシンガポール、マレーシアなどが可能性を持っていると思われ、そのマーケットを取り込むために、航空機の着陸料引き下げなども、必要になっていくこともあるかと思う。

・新青森開業が迫っているが、大がかりなデモンストレーションが見えてこない。開港150周年のイベントでも結局は数字に結びつかなかったことを反省し、この大きなチャンスを捉えなければ、函館の将来は無いという思いで、今日の前にあるチャンスを生かすことを考えるべきだと思う。

(中野委員)

・景気の落ち込みが影響し、観光客が動いていない状況となっているが、夏場のシーズンですら落ち込んできているといった現状分析を我々自身が進めていかなければならない。今年度上期は、対前年比7.5%減であったが、下期の入り込みも同じように落ちていくと通年で430万人程度になるのではないか。このまま平成22年度も同じように7.5%減となると、400万人を割り込む恐れすらある。そのような最悪のケースも想定した上で、今後どうすべきかを考えるべき。

・来年、箱館奉行所がオープンするということがプラスで捉えられているが、実際には、

教育施設の要素が強く、情報がなかなか出てこない。旅行代理店は1月時点で夏シーズンの商品を作り終えてしまうので、今のタイミングで情報が出ていないということは、秋・冬物の旅行商品にしか間に合わないのではないかと危惧している。

・観光というのは、景気が良ければ伸びるし、悪ければ落ち込むのが常だと思う。函館市の上期の入込客数について言えば、6月～7月が大きく落ち込んだのは、JRA函館競馬場の改修工事の影響も大きいのではないかと。来年のこの時期は伸びると思う。とにかく現状分析をしっかりとやって、それに対する中長期的な対策・対応を、途中で検証しながら進めていくことが大事だと思う。

(折谷委員)

・上期の入り込みが22年ぶりに300万人を割り込んだと聞き大変驚いた。また、私も取り組んでいる光の小径も、下期の入り込みを伸ばすために、頑張っていかななくてはと気持ちを新たにした。光の小径は3年前から取り組んでいるイベントで、今年は6カ所を実施するが、同時に実施している五稜星の夢の電球をLEDに変えられないだろうかと思っている。お金のかかる話だと思うが、実現できれば市民・観光客が一緒になって、環境問題も考える機会にもなるのではないかなと思う。

・バリアフリーボランティアの活動もしており、駅や空港でのハンディキャップを持つお客様の案内の実験は、大変好評で手応えを感じる。このような活動が広がれば、今まで躊躇していた障がいを持つ方やお年寄りがもっと旅行に出かける機会づくりにもなり、函館にそのような活動があるという情報を発信することで、入り込み客数も少しずつかもしれないが増えていくのではないかと期待している。

(原田委員)

・アンケート調査の結果で、函館を選んだ理由として、「夜景・グルメ・歴史的建造物」が大きな割合を占めているが、逆に考えると、これ以外の部分を伸ばしていくとさらに観光客の増加につながっていくのではないかなと思う。函館観光のイメージは夜景、歴史に代表されるように「静的」なものが多い。急に思い立って函館に出かけたくなるような「動的」なきっかけがあってもいいと思う。

・大沼の観光事業者から、台湾人観光客が「連なって走る自転車」に乗るために来るといった話を聞いたことがある。乗っている人は楽しそうに乗っており、この様子が台湾においてPRされており、それが奏功しているとのこと。函館も、行列が出来ているとか、楽しそうとかいうものを活用した「動的」なイメージでのPRをしてはどうだろうか。楽しそうな街の雰囲気作りを行うことが重要だと思う。

(全 委員)

・ホスピタリティを高めるという意味は、観光文化都市をつくるということだと思っている。観光客が足を運ぶ地域の住民が、例えば韓国人観光客を対象とするのであれば、5つの韓国語を覚えるような取り組みはどうだろうか？その言葉を聞いた韓国人観光客は驚きと共に大変な喜びを感じると思う。普段、私は韓国語の講師をしているので、まずは西部地区に住んでいる方々に覚えていただき、それから五稜郭地区というふうに拡げていきたい。

・ホスピタリティ意識を一気に高めようとするのは大変難しいこと。全ての市民が「一歩」前に進むだけですごく大きな力になると思うし、そういう活動をやっていきたくて考えている。言語を「分かっている」とこと、「話すこと」は別物だと理解しているが、いっぺんに沢山の情報を詰め込むのではなく、一步一步着実に進めていきたくて思っている。

(遠藤委員)

・入込客数に関して、交通機関別で見ると、伸びているのはJR海峡線であり、やはり今後、北関東・南東北に力を入れていくべきだと思う。また、530万人が訪れていた時期というのは、ジャンボ機全盛時代で、航空機の輸送力が大きく、海外からのチャーター便も沢山飛んでいた。一方で、席を埋めていくための格安ツアーも多かったようにも思う。だから今の状況を危機と見るのではなく、既存の観光資源を活かした取り組みを進めていけば良いと思う。また、公表データについて、客数では落ちているが、「宿泊延べ人員」ではここ4年くらい伸びているはず。こうした実数を出していくことも検討してはどうかと思う。

・来年の新青森開業を間近に控え、首都圏では青森のポスターや告知物がたくさん掲示されており、函館はこれに便乗すべきだと思う。2015年の函館開業時ではなく、来年が勝負だと思う。八戸の例を見るまでもなく、開業後3～4年で開業効果はなくなる。青森だけではどうにもならない、函館と連携すべきと考える青森の関係者も多くいる。

(藤澤委員)

・観光アドバイザー会議の位置づけが大事だと思う。この場はそれぞれの情報を持ち寄って意見交換するだけでなく、観光基本計画の評価・検証・推進組織としての役割をしっかりと認識して、それに特化した形で議論すべきだと思う。

・函館は観光地になりきれていないとの印象を持っている。基本計画の理念に「観光でまちづくり」とあるが、「まちづくり」とは何かから議論していくべきだと思う。そうしないと、観光産業は裾野が広く、議論が拡散してしまう。

・観光地とは、住む人誰もが「観光が基幹産業」とであると認識していることだと思う。そう思っている人が少ないから、函館は観光地になり切れていないし、まちづくりも進まない。誘客を目的としたイベントや事業を実施しても、こうした市民の無関心が障壁となっ

で実績に結びついていない。観光事業者は努力していると思うが、それ以外の業種の方、例えば、飲食業の方は自分が観光産業に従事しているとはあまり思っていないところもあるのではないかと。そういう認識を一つ一つ変えていき、観光客のリピートにはつながるよう、観光地づくり、この地域が観光地であるという気運を高めていき、観光産業を発展させていくべきだと思う。

(田中委員)

・観光地である前に市民に愛される街になる、そうすれば自ずと観光客は足を運ぶと思う。函館はリピーターの多い街であると認識しているが、その要因分析が出来ていない。アンケート調査をクロス集計すれば、ある程度分かってくると思うし、2回目、3回目の観光客に対する戦略も生まれてくる。

・不況の昨今であるが、減っていない観光地もある。その要因を分析して、きちんとした答えを我々は持たなくてはならない。ヒントとして、函館市交通局が実施している運転体験、3日間講習を受けて電車を運転するというものだが、大変好評だという。既存の資源で需要のあるものを掘り起こしていけば、滞在日数を伸ばし、消費単価を上げることもできると思う。

(木村座長)

・皆さんの色々なご意見は非常に頷けるところが多かった。また、来年T S Aという新しい統計手法が導入されれば、産業としての観光業が把握でき、客観的に見ることが出来るので、そういったことも踏まえ、色々なデータも分析しながら、この会議の評価組織としての機能も発揮していきたいと思う。

(事務局)

・次回会議は4月以降に開催したい。その際には現在進めている観光基本計画の中間評価や、新年度事業についての説明を行いたい。